

國學院大學學術情報リポジトリ

中島金太郎著 『地域博物館史の研究』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 順平, Tsukamoto, Junpei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000447

中島金太郎著

『地域博物館史の研究』

塚本順平

はじめに

本書は、静岡県で学生時代を過ごし、様々な博物館を訪れた中島金太郎氏が、近代博物館成立以前から現代に至るまでの静岡県の博物館史を纏めたものである。著者は、國學院大學の青木豊教授や長崎国際大学の落合知子教授等の下で博物館学を学び、國學院大學文学部助手を五年間務めた。

我が国には、博物館が五〇〇〇館以上存在し館種や運営等様々で、「公立博物館の設置及び運営に関する基準」の第四条3の内容から、動物園・水族館・植物園も博物館の範疇に含まれる。博物館設置の全国的な凡その傾向は読み取れるが、各都道府県の地域性や歴史背景から、地域博物館は様々な独自の形態が存在する。

著者は、都道府県ごとの博物館設立の歴史を明らかにし、特性を把握することが現代の博物館における、地域的な問題の解決やアイデンティティの確立に繋がるものと考え研究を

行った。かつて、國學院大學の加藤有次博士を中心として進められていた全国博物館発達史の編纂においては静岡県の博物館史は纏められておらず、また歴史博物館・自然史博物館・美術館・動物園・水族館・植物園等を全体的に取り扱った論考・書籍も存在しない点から、著者は研究に意義を見出している。

前述の國學院大學においての各都道府県の博物館史編纂事業について、著者は数点の問題点を述べている。その中の一つに、対象とする博物館の館種の偏重が挙げられており、美術館に関する視点が希薄で、動物園・水族館・植物園の記述については皆無であると言っても過言ではないと指摘している。その点において本書は、後に記述する通り、様々な館種の歴史・発展や推移について纏め、分析・考察を行っている点特徴と言える。また、使用している文献は博物館学の文献はもちろんのこと、『延喜式』、江戸・明治の書物、明治・大正・昭和の静岡の新聞記事、観光に関連する文献、川端康成の『伊豆の踊子』等多様である。それらの資料から、政治・文化・経済等を含めて静岡県の博物館について多角的に考察し、さらに最新の情報も提示していることは特筆すべき点である。

本書は、以下の通り終章を含む十一章で構成されている。

第一章 博物館に関する歴史研究の意義

- 第二章 博物館設立前史
 - 第三章 歴史系博物館の誕生と展開
 - 第四章 自然史・科学博物館の出現と展開
 - 第五章 美術館構想と静岡県における発展
 - 第六章 動物園発展の歴史と推移
 - 第七章 水族館展開の推移と傾向
 - 第八章 植物園の誕生と発展の推移
 - 第九章 学校における博物館の設置と推移
 - 第十章 これからの静岡県の博物館
- 終章

本書の内容

第一章では、我が国における博物館史の研究の動向と各県単位の博物館史研究の背景と意義について先行研究を纏め、論証している。我が国の博物館学の研究は、理論研究より実践研究の方が多い傾向にあり、その指摘は戦前からされているが現在まで殆ど変化していないのが現状である。

また、博物館史の研究は明治三十七年に内田四郎が執筆した「繪畫陳列館」を嚆矢として、昭和初期の棚橋源太郎の研究、戦後の川崎繁・伊藤寿朗等の研究を経て全体的な編纂はされた。その後、椎名仙卓や金山喜昭、高橋雄造によって国内外の博物館史が研究されてきた。一九八〇年代からは前

述した國學院大學による各都道府県の博物館史を編纂する事業が始まり、よりミクロな研究へと移行していった。しかし、この事業は平成一四年以降進展を見ることができず、現状は休止の状態である。著者は、休止理由について三点考察している。一点目は膨大な資料収集の困難さ、二点目は執筆者が学芸員や文化財担当職員であったことによる本務との兼ね合いによる問題、三点目は事業推進当時の都道府県立博物館の有無である。

さらに、著者は当該事業によって編纂された博物館史についても、①内容が不統一であり時代区分や明確な基準等がなく、情報量も不足しており比較できるデータ作成とならなかったこと、②博物館史の対象となる館種の偏重を問題点として挙げている。また著者は、各都道府県の博物館史を編纂する上で、多様な博物館種を対象にすること、精度の高い資料収集・歴史編纂、事実の羅列ではなく分析・考察をするべきだと主張し、すでに前回編纂された都道府県であっても現代に即した内容に更新・補填すべきであると述べている。これはもつともな主張であり、本書は当該思想に基づいて書かれているので、今後、博物館史を編纂する上でこの章や本書を参考にすべきである。

第二章は、江戸時代・明治時代における神社・仏閣の展示活動、静岡県における物産陳列館・博覧会等の実態、社会教

育施設の隆盛と博物館について博物館設立前史を纏めている。広義の展示としては、明治維新前よりなされてきた神社・仏閣の居開帳や出開帳に遡ることができる。モノを展示して観覧に供する博覧会・共進会・物産陳列館は、明治時代に始まり戦前期には全県に広がり、展示手法や施設等技術の進展に影響したと見ることができるとも、静岡市の博覧会、浜松市の全国産業博覧会の会場に設置された美術館等の施設は、その後の博物館設置や一般市民へ博物館の存在を印象付ける効果があったと論述している。また物産陳列館は、明治中期に他県では見られない県が補助を行いその機能を地方に分散させるシステムを確立し、人々に特定の場所にモノを見に行くという意識を植え付けたことは、博物館的であると述べている。

戦後の社会教育の隆盛において博物館設置が一般化しなかったことについて、戦前から博物館が少なかったこと、設立に積極的でなかったことを挙げている。一方で、図書館や公民館に郷土資料の展示空間が設けられ、郷土博物館の代わりとして機能していたことが特徴的であると分析している。博覧会の様子等の詳細な記述・考察は、当時の静岡の新聞記事等に裏打ちされたものであり、著者の高い資料収集能力が窺える。

第三章は、戦前期の歴史系博物館、戦後の歴史系博物館の

展開について考察が行われ、最後に静岡県の歴史系博物館の傾向が纏められている。戦前期の静岡県の歴史系博物館は、明治四十一年に静岡中学校と浜松中学校に設けられた学校博物館が嚆矢であり、単独で開館した博物館は昭和五年の私立の下田武山閣であった。大正一四年にも歴史資料の展示は確認できるが、森斧水の個人的なコレクションであり何れも地方自治体は関わっておらず、戦前期は学校博物館以外の公立館が皆無であったと論じている。

その後、戦中・戦後にかけて登呂遺跡や伊場遺跡、蜷塚遺跡等の調査を基に公立の歴史系博物館が増加し始め、リゾート開発や文化庁の補助金等の影響で昭和五十年代に大幅に増えた。平成に入ると、閉館する館も出始める一方で、住民との親和性を求め従来存在した建物を再利用して開館する事例も多くなる。また平成二十年代は、館の統廃合やリニューアル増減を繰り返している時期であると述べ、今までの博物館活動を振り返り、既存の館の活動や今後新設・リニューアルする館等にフィードバックさせることが必要だと主張している。

全面保存がされず、遺跡を紹介した資料館も閉館したことで、伊場遺跡の知名度が急速に低下すると著者は考察しているが、確かに専門外とはいえ、登呂遺跡を知っていた筆者は伊場遺跡のことを知らなかった。しかし本書を読み、一連の

保存争議や閉館の流れを知ることができた。斯様な、放つておけば風化してしまうような事柄も調査し、分析・考察を行い記すことによつて他の博物館や一般に周知することは、各都道府県の博物館史を編纂することの意義の一つであると筆者は感じた。

第四章は、戦前期の自然史・科学博物館、戦後の自然史・科学博物館、静岡県 of 自然史・科学博物館の傾向について纏め、論じている。戦前期は、博物館構想は見られるものの開館した事例は存在していないとしている。その理由として著者は、計画の不十分さや土地・資金の面で民間を当てにしていたことを挙げて考察している。静岡県の科学博物館は、児童向けの科学館等に始まり、自然史博物館は東海大学の博物館群が濫觴となる。近年では初の県立博物館であるふじのくに地球環境史ミュージアムや、伊豆半島ジオパークミュージアム・ジオリアが誕生している。静岡県の自然史・科学博物館は、観光型が少なく私立であっても調査や普及活動に力を入れておりと著者は指摘し、その要因として岩石・地質等の資料が観光向きでなかったこと、博物館が明確な使命を持っていたことを挙げ、知識・情報を資料と体験を通してわかりやすく伝える普及啓蒙の機関であると断言している。

一方で、著者はふじのくに地球環境史ミュージアムと伊豆半島ジオパーク・ジオリアの課題も挙げている。前者は、歴

史系分野が統括されている施設ではないこと、廃校を再利用したことによる立地の問題、施設名称から展示内容が想像しづらい点、展示範囲・展示規模が小さいこと等を指摘している。また後者は、サテライトとして伊豆半島各地のビクターセンターとうまく連携が取れていない点、ジオリアが核となる施設にもかかわらず実物展示が少なく来館者に対する教育活動が希薄であること、ビクターセンターの設備・内容の向上が必要であることを指摘している。著者は、ただ問題点を挙げるだけでなく、自分の眼で実際に見て分析・考察を行い、改善策を提示し、今後の各館の展開に期待をしている。

第五章は、美術館の発生、戦後美術館の動向を論証し、経済や観光・リゾート等の背景を踏まえた考察によつて、みごとくに戦後美術館の動向が纏められている。明治四十三年に設置された社会教育を意図された静岡美術館に濫觴を見ることができ、これは全国的に見ても早いとしているが、大正から終戦直後にかけての開館例は殆ど見られなかったようである。また、昭和五十年代から平成十年代にかけて爆発的な増加を見せ、平成二十年以降は緩やかに増加している傾向にあり、立地としては伊豆半島・静岡市・浜松市・掛川市といった特定地域に集中していることが特徴的であると述べている。その理由として、伊豆半島は観光資源として美術館を位置づけたこと、静岡・浜松市は政令指定都市であり社会教育

機関や娯楽施設として設立されたこと、掛川市は掛川城の城下町として栄えたことで歴史資料・美術資料が多く残っていることが要因であると考察している。

著者は、前述の静岡美術館や昭和六十一年に初の県立博物館施設である静岡県立美術館が開館した背景等から、美術館が静岡県の博物館をリードしてきたと考察している。また、県下の美術館は、公立・私立、研究型・観光型と明確に対比できることが特徴的だと論じている。

第六章では、静岡県の動物園史の概況、代表的な動物園設置と運営について動向を分析し、今後の展望とすることを目的としている。動物園は、大正八年の静岡博覧会の時に初めて設けられ、常設としては昭和二年の狐ヶ崎遊園地においての設置を嚆矢とし、付属施設から始められた。熱川バナナ・ワニ園のように研究と飼育の両面で成果を上げている園も少なくないが、静岡県の動物園は主として観光に資する施設として発展してきたことから娯楽要素が強く、研究機関である博物館としての意識が希薄であると指摘している。著者は、より集客力の高い動物園を目指すには、展示活動に更新性を持たせ観光施設に留まることなく、情報が誰にでも分るようになんて工夫し、博物館として運営するべきであると主張している。また、動物園と植物園が融合した施設として設立される傾向が強いことが特徴的で、さらに熱帯・亜熱帯地域

の植物との組み合わせが目立つと述べている。この要因は、湧き出る温泉を使用することで栽培・飼育環境が維持できるからである。

熱川バナナ・ワニ園以前に、熱海鰐園が存在していたようだが、断片的な記録しか残されてなく、閉園後にワニや他の資料がどこへ行ったか等、解決しきれない疑問を今後の課題としている。この章は、これまで体系化されていなかった静岡県の動物園の歴史と動向を、表を用いて纏め上げ、分析を行っている。

第七章は、静岡県水族館史と概況、代表的な水族館設置と運営を歴史の記述を交えて考察し、さらに全体的な傾向を見出すとともに設置の意義を探ることを目的としている。水族館は、昭和五年の中之島水族館を嚆矢として、主に東部地域に発展し、特に沼津市に集中している。その理由として著者は、海産資料の収集が容易であることや伊豆地域のさらなる観光施設として設置されたことに起因すると述べている。しかし昭和中期には、工業化と港湾整備等による海洋汚染、また昭和三十五年のチリ沖地震の津波の影響で打撃を受け、同四十二年に下田海中水族館がオープンしたものの、以降三十年間新設はなかった。また、費用の割には観光資源として集客性が見込めなかったことも新設に至らなかった一要因ではないかと独自に考察している。平成十二年に教育的意図を持

った県立の水族館が誕生し、平成二十三年には沼津港深海水族館が開館した。前者は教育機能に重点が置かれた博物館的意識の水族館であり、後者は世界で初めて深海生物をテーマにした水族館であり、各々特色が出ている。本章では、沼津市内に設置され、同じ深海生物をテーマとした標本を保存・展示している駿河湾深海生物館についても言及している。同館は、沼津港深海水族館と比べて大幅に来館者が少ない。理由として、立地の悪さと資料の劣化等を挙げている。解決策として著者は、沼津港深海生物館と連携することを提案している。これは安易に主張しているのではなく、著者が実際に両館に赴き、観察し、分析・考察した結果に基づいている。

第八章は、植物園の定義と分類、静岡県植物園発達史、植物園の課題とこれからの記した章である。著者は、本章で我が国の植物園を機能や栽培・展示形態によって分類する独自の分類方法を提起している。機能による分類を【研究型植物園】(A型)、【観光型植物園】(B型)とし、栽培・展示形態による分類を【庭園タイプ植物園】(Iタイプ)、【温室タイプ植物園】(IIタイプ)、【耕作タイプ植物園】(IIIタイプ)と細分しており、注目すべき点である。また、本章の中では静岡県に開園された主要な植物園をこの方式に則り、A―Iのように表記し、表を作成している。この分類法は、理にかなっており、著者の評価されるべき研究成果の一つであろう。

静岡県の植物園の源流は、江戸時代に設立された薬園に求めることができ、近代植物園の発生期においては研究型植物園も登場するが、どちらも大衆に開かれたものではなかった。その後、遊園地等に大衆に開かれた植物園が多数開館した。著者は、静岡県の植物園は観光施設の意味合いが強いと指摘するとともに、大学や研究機関付属の植物園を除き、我が国の植物園全体に共通することであると述べており、研究・教育に対する姿勢が弱いと苦言を呈している。

第九章は、静岡県内学校博物館の誕生、戦後の学校博物館について論証するとともに学校博物館・学校博物館論を改めて検討し、意義について考察する章である。嚆矢は、明治十一年の静岡師範学校に設けられた理科教授のための機器室に求めることができ、その後明治四十一年に郷土博物館としても機能していた静岡中学校の参考品陳列館、浜松中学校の歴史参考館の両館が開館した。昭和初期には、郷土教育に応じた国の補助金を受けた静岡師範学校、女子師範学校、浜松師範学校に郷土研究室が設けられた。これらは、県立の郷土博物館設立を目指したもので、確かな目標を見据えて研究・教育活動を実践していることは、他県と異なり特徴的であると著者は考察している。しかしながら、博物館の周知に貢献した学校博物館も、戦中の疎開や戦後の教育方針の転換の影響で完全に消えてしまったという。戦後長い間、小・中学校や

高等学校に設けられてこなかったが、数は少ないものの昭和五十年代から平成にかけて増加を始める。一方で、東海大学をはじめとする静岡県に所在する大学が、大学博物館を設けるようになってきた。県内に大学は多いとは言えないが、多くの大学博物館が設置されたことは特徴的であると著者は指摘している。

現在でも学校博物館は設営が続けられているが、少子化に伴い学校が廃校となり閉館した例もある。著者は、動きが読めない感があるとしつつも、多様に変化すると想定しており、その中で資料を如何に次世代に伝達していくかを考え、散逸は防がなければならないと論じている。また、博学連携にも言及しており、博物館と学校博物館を有する学校との連携を強化し、教員側にも相応の知識をつけてもらう等、より良い運営が続けられる取り組みが必要であると著者は考えている。

第十章は、静岡県の博物館の傾向と課題、今後望まれる静岡県の博物館のありかたについて今までの内容を踏まえて考察している章である。著者は、県や自治体による博物館事業への関与が希薄な傾向が静岡県の特徴であると論じ、そういった歴史的背景が現在までも博物館事業が低調な理由であると捉えている。また、第二の特質として静岡県民の郷土に対する執着の薄さを指摘し、郷土博物館が発展しなかった要因

の一つであると分析している。さらに第二の特質と関連して、県内に多数存在する美術館が、地元に関連する作家や作品にあまり着目していない点も挙げている。そして最も顕著な特性として、異常なほど多く観光型博物館が存在していると述べ、博物館・ミュージアム・美術館を名乗るものの、観光資源としても本質的な博物館としても不十分であるとしている。他にも公立博物館や学芸員更新・採用の問題等分析に余念がない。

今後の博物館のありかたとして著者はまず、観光型博物館と地域住民の協働を唱え、観光型博物館も郷土の一つと捉え、市や民間と協力すれば地域への活気をもたらすこともできると論じている。また、郷土博物館も地域住民に必要とされる博物館となる必要があると述べ、特に若年層が気軽に利用でき、郷土に愛着が持つことができる博物館であるべきと、博物館体験・博物館実習等の例を交えつつ論考している。さらに、勉強や写真撮影を禁止する等、何もかもを縛るのではなく、利用者主体の誰もが親しみやすい・利用しやすい博物館経営を行うことが理想であり、理想を理想で終わらすのではなく、そこへ向かって試行錯誤する必要があると、著者は主張している。

以上、簡単ではあるが本書の各章の紹介を行ってきた。本稿では述べていない、具体例を使用した明細な分析・考察も

本書にあるので、ぜひ直接手に取って確認して頂きたい。また、表や写真を上手く使い情報を伝えている他に、他県や他の地域と類似している個所があれば比較することにも余念がなく、静岡県独自の性や特徴を理解することができる。強いて言うならば、筆者のような地理に疎い人間のために、本書に登場する主要な地域名が記載された静岡県の地図があれば、なお理解しやすかったと感じた。また、本書のタイトルに静岡と言葉が入っていれば、博物館関係者だけでなく静岡出身の人にも手に取ってもらえるのではないかと思った。

本書は、これから各都道府県の博物館史を編纂する者にとって、時代区分、館種、項目、分類等非常に参考となる書である。また、閉館した館や放っておけば埋もれてしまう事柄にもスポットライトを当て、地域性の確認やフィードバックができるように原因等を分析・考察して記すことも、博物館史編纂の意義でもあり、本書の意義の一つであると感じた。

今後の静岡県博物館史の更新や、著者のさらなる活躍を祈るとともに、書評の重任を頂いたことにお礼申し上げます。

二〇一七年十月刊、A5版、三三二頁、雄山閣、定価九〇〇円＋税